

## プロフィール

早稲田大学アジア太平洋研究科（国際教育開発専攻）在学中、国連児童基金（UNICEF）フィリピン事務所でのインターンを経験。卒業後は児童福祉施設での子どもの生活・学習指導、早稲田大学国際コミュニティセンター（現：異文化交流センター）での課外活動企画・運営および学生スタッフの指導に従事。2016年5月より、本事業で UNICEF キルギス共和国・オシュ地方事務所に派遣され、教育・保育・子どもの保護プログラムに携わる。研修終了後の現在も、同事務所にて平和構築担当官として継続勤務中。

### 1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

バングラデシュで暮らしていた小学5年生の頃に開発途上国の子どもの問題に関心を持ち、UNICEF を目指しはじめました。その後はまさに「UNICEF 一直線」という進路選択を重ね、学部卒業後ストレートで進学した大学院時代には、UNICEF フィリピン事務所でインターンをさせていただく機会にも恵まれました。しかし、いざ夢の組織のなかで働いてみると、自分にはまだまだ教育・保育の専門家としての知識と実務経験が足りないことを痛感。それまではずっと海外志向だったのですが、まずは日本で保育士の国家試験に挑戦しながら、子どもや若者とじっくり向き合うことのできる現場で経験を積もうと決めました。プライマリー・コースを知ったのは、日本で働き始めて3年目を迎えようとしていたときのことです。そろそろ UNICEF に戻るためのシフトチェンジができたかと考えていたので、迷いなく応募を決めました。

### 2. 国内研修に参加した感想は？

開発に関してはある程度の知識と経験を有していましたが、平和構築についてはまるで初心者の私だったので、国内研修での学びはとて多かったです。講師は、いわゆる「前線」での豊富な経験をお持ちのプロフェッショナルばかりで、理論だけでなく実体験に基づくケースを通し、具体的なイメージを持って平和構築を学ぶことができました。

さらに、近い志を持つ同期の仲間に出会えたことも貴重な財産となりました。皆とよく語り、よく考えた6週間はとて濃く、今振り返ってもまたとない体験をさせていただいたと思っています。世界中で活動する同期とは今でもよく連絡を取り合い、支え合うことができているとて心強いです。

### 3. 海外実務研修での活動について教えてください。

私は、UNICEF キルギス共和国・オシュ地方事務所に平和構築担当官として派遣されました。主な業務は、国境を接するキルギスおよびタジキスタンにて、計5つの国連機関が共同実施する国連平和構築基金（PBF）プロジェクト（通称「クロスボーダー・プロジェクト」）の UNICEF

キルギス事務所代表として事業を牽引すること、またキルギス南部における教育・保育・子どもの保護分野の各種プロジェクトを実施・監督することでした。キルギス南部のフェルガナ盆地と呼ばれる地域では、キルギス・タジキスタン・ウズベキスタンの3か国が国境を接しているのですが、その「国境」は正式な合意がない部分を多く含み、土地や水資源をめぐった異民族住民同士の争いが多く報告されています。さらに、2010年には私が駐在するオシュ市内でキルギス系・ウズベク系住民による民族間衝突が勃発。一説では、470名が亡くなり、40万人にもおよぶ市民が避難民となったとも言われています。このような脆弱性を備えたコンテキストのなかで平和構築担当官として働き、特に自身の専門である教育・保育分野のプロジェクトに携われることは、本当にやりがいのあるものでした。



タジキスタンとの国境に面した小学校にて。学校名が書かれたバナーのキルギス国旗の下には、道のすぐ反対側に住むタジキスタン住民から投石された跡が残っています。



研修に参加した先生からロシア語を学ぶ中学生たちにインタビュー。国境を接するタジキスタンの若者とコミュニケーションが取れるようにと、共通言語であるロシア語の課外活動を導入しました。

#### 4. 海外実務研修での感想は？一番印象に残っていることは？

任期中、派遣先事務所の規模が縮小されることになり、13人いたスタッフは9人にまで減りました。契約終了となった4人のなかに教育・保育・子どもの保護担当官のポストも含まれており、私が彼の職務を引き継ぐことになったのですが、ひとりのプログラム・オフィサーとして戦力にならなければいけないプレッシャーはとても大きかったです。複数のプロジェクトとそれに付随するアクティビティを同時進行でまわすことはもちろん、それぞれのアクティビティには異なるカウンターパートが何人もおり、調整も重要任務。しかし、ロシア語ができない私にとってはシンプルなコミュニケーションすら一苦勞で、毎日深夜まで仕事をしても終わらず、途方に暮れる日が続きました。さらに、男性優位・階級主義社会のキルギスにおいて、ベテラン男性ナショナル・スタッフの穴を埋めるのは想像以上にチャレンジングでした。そんななか、国連平和構築基金（PBF）のクロスボーダー・プロジェクトで、初めて一から担当したアクティビティの視察に訪れ、タジキスタンとの国境沿いの学校でロシア語を担当する先生たちが生き生きと能力強化研修に参加する姿を見たときは、涙が出そうなほどの達成感を覚えました。まちがいなく、最も印象に残っている瞬間のひとつです。



クロスボーダー・プロジェクトの一環、ロシア語指導能力強化研修に参加する先生たち。

#### 5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

来春まで今の事務所で勤務させていただけることになっているので、残された時間でより成果を出せるようにがんばりたいと思います。また幸いなことに、その後は JPO としてどこかの UNICEF 事務所に配属されることも決まりました。教育・保育専門家として成長し、一步一步キャリアを積んでいきたいです。

大学院生の頃、UNICEF フィリピン事務所でのインターンと平行してフィールドワークを行い、幼児教育政策に関する修士論文を書いたのですが、現場の子どもや先生たちの声が届かないところで政策が議論され形づくられていく様子を痛いほど目にした経験が、私が「現場」にこだわる原点となっています。これまでどおり、若いうちはできるだけ現場に近いところで実務経

験を重ね、いずれは「現場センシティブティ」を持ちながら政策提言ができる専門家になりたいと考えています。

#### **6. 事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。**

私は自分なりの信念を持って、大学院卒業後に日本の教育・保育現場に飛び込みました。しかし、いざ開発分野から離れてみると、どうやったらまた「あの世界」に戻れるのか、自分のようなバックグラウンドを持った人間に、ただでさえ狭い門戸は開かれるのかと不安に駆られることも多々ありました。そんななか、本事業と出会い、未知の分野であった平和構築について基礎から学び、国際機関でのキャリアに再挑戦するまたとない機会を与えていただいたことに、心から感謝しています。特に、数年前の私のように悩んでいらっしゃる方には、ぜひ本事業へのご応募を前向きに検討していただけたらと思います。